



障がいのある子とない子がともに成長できる学校生活とは

新潟県教職員組合 寶川 有華

A と出会い、5・6年生の2年間を担当させてもらったことは、私の一生の宝物になった。

A は、先天性両手欠損、両足発育不全という障がいがあり、手の代わりに足を使って学習や食事、工作(下の作品参照)などを行っている。本人と保護者の願いで通常学級に在籍。



この版画は、他の子の何倍も時間がかかった。A は、並並ならぬ努力家である。「みんなと同じように活動したい」といつも前向きに取り組んでいる。

担任になり、A やその周囲の見え方が変わった。介助員が先回りして支援したり、A が介助を待っていたり、その横を友達は無言と通り過ぎていく、そんな日常の様子に疑問を感じるようになった。社会でよりよく生きていくためには、障がいの有無に関わらず、「助け合い」が大切である。「助けを求められたら当たり前の手を差し伸べる」

「困ったときには、〈助けて〉〈教えて〉〈相談に乗って〉とヘルプを出すこと」「人の苦手や失敗に寛容になること」を繰り返し子どもたちに伝えてきた。

それを表現できる雰囲気をつくっていくのは、身近な大人である教職員の大きな役割である。そこで、私が率先して、人間らしさを見せるようにした。「高くて届かないから、お願い」「失敗しました、ごめんなさい！」と言うと、「しょーがないな〜」と笑いながら受け止めてくれる子ばかりだった。弱みを見せることは、「あなたを信頼しているよ」というメッセージにもなると思う。「助け合いは当たり前」という考え方が少しずつ広がり、A も友達に頼みやすくなり、気持ちよさそうに「ありがとね」と伝えている様子が増えた。

A が日々悩み、葛藤し、我慢の連続でもどかしい気持ちを抱えて過ごしていることは、A と関わる中で知ることができた。そして、それらを共有しながら互いによりよい方法を考えることで成長し、生活や心が豊かになっていくような環境づくりに努めていきたい。